

CONTENTS

特集／マルチメディア時代の到来——電子博物館構想への第一歩

■巻頭言

デジタルミュージアム——博物館の未来をめざして 坂村 健 4

■論文

東京国立博物館の文化財情報システム 高見沢明雄 6

美術館活動の拡張と情報——国立西洋美術館 波多野宏之 8

山梨県立美術館ホームページの現在と未来 神野真吾 10

私立美術館とマルチメディア 西田宏子 12

——美術品を情報として公開する取組み

文化資産のデータベース化と情報発信 中野茂光 13

——「石川新情報書府」構想の推進

「岐阜県版デジタルアーカイブ構想」(仮称)について

岐阜県企画部情報企画課 15

文化財・美術品情報ネットワーク 伝統文化課 17

文化財、学術・研究資料のデジタル・データベース構築を
めざす「デジタルアーカイブ推進協議会」の取組み 秋山 博 18

連載

●随想／囲碁は世界を平和にする 武宮正樹 20

●日本の伝統美と技を守る人々⑩ 本場結城紬技術保持会 22

●海外だより 海外の文化事情／フランス篇(5) 25

●メセナ紹介／5 (財)沖永文化振興財団 26

●言葉の小窓——新「ことば」シリーズより——／5 28

ACA(Agency for Cultural Affairs)NEWS

・文化財の新指定(美術工芸品関係-2)29

・重要無形文化財の指定及び保持者の認定37

・選定保存技術の選定及び保持者の認定40

・記録作成等の措置を講ずべき無形の文化財の選択41

・九州国立博物館(仮称)「基本計画」の検討に着手42

イベント案内

・東京国立博物館「インドネシア古代王国の至宝」/43

・新国立劇場 オン・ステージ/44

・9月の国立劇場/46

・芸術文化振興基金ニュース/47

・表紙解説/編集後記/48

毎年日本で、世界アマチュア囲碁選手権戦が行われています。参加国は約五〇カ国。その数は年々増え続けており、近い将来にはオリンピックのように、世界の祭典に発展するものと思っています。

私は審判長としてこの大会に関わっているのですが、世界中から集まったアマチュア棋士たちの熱戦を間近に見るにつけ、囲碁は国家、民族、宗教を越えて対話を可能にするゲーム、という思いを深めるのです。こちらの盤では、本来は相容れない宗教を持つ人たちが白石と黒石で対話をしています。あちらの盤では、肌の色の違う人たちが、お互いの健闘を称え合っています。こんな光景がそこで見られ、大会が終了すると、彼らは翌年の再会を約して帰国して行くのです。

日本は、文化の面で世界に貢献することが少ない国だと言われますが、私たちは囲碁という、世界中の人々が心の垣根を取り払って楽しむことのできる文化を持っていることを忘れてはならないでしょう。

囲碁をおやりになる方ならご存じでしょうが、現在中国と韓国のレベルは急速に向上しており、日本を凌駕する勢いをみせています。レベル向上の要因はいろいろ考えられますが、たとえば中国の場合は、藤沢秀行名誉棋聖の存在を抜きに今の盛況を考えることはできません。

秀行先生が、囲碁の普及のため、たびたび中国に渡られるようになってから、もう二〇年はたつと思います。先生は、囲碁勃興期の中国で、若い才能を徹底して鍛えました。最近、中国でもプロ棋士が誕生しました。その重鎮である聶衛平さんなどは、そのころ秀行先生に教えを受けた一人です。

誰かが中国を訪問した際の新聞記事などに、「熱烈歓迎」の文字を目にしますが、囲碁も大変な歓迎ぶりです。マスコミの注目度も高く、世界棋戦や日中タイトル保持者同士の対戦の際には、多くの報道陣が詰めかけ成り行きを見守ります。こうした中国の囲碁繁栄の基礎づくりに大きな貢献を果たしたのが、秀行先生なのです。

韓国は中国と事情が異なりますが、繁栄の基礎づくりと日本の基界は決して無縁ではありません。

日本の囲碁ファンが韓国の基界に注目するきっかけをつくったのは、李昌鎬という天才棋士の登場によつてでした。彼はまだ二〇代前半の若い棋士ですが、一四、五歳で頭角を現し、次々と韓国のタイトルを獲得してゆきました。

当時、韓国基界のナンバーワン棋士でありタイトルを独占していたのは、曹薫鉉九段。彼は、李昌鎬のお

囲碁は世界(平和)です

武宮正樹

師匠さんです。弟子が基界の第一人者である師匠の持つタイトルを相次いで奪取してゆく。これだけ見ても韓国のレベルが急上昇したことが判ります。

薫鉉さんは、少年時代から日本で修行し、プロとして活躍していました。私は同世代ということもあって親しくしていたのですが、兵役に就くため帰国し、その終了後は韓国基界を発展させるため、母国で棋士生活を送ることになりました。才能に恵まれた人でしたから、もし兵役のことがなかったなら、日本でも必ず多くのタイトルを獲得したと思います。もつともそうなる、韓国の囲碁の隆盛はもつと遅れたかもしれませんが。

このように、中国も韓国も、その基界の発展に日本の基界が深く関わっています。

たしかに、二〇年前であれば、日本は碁の総本山を自認して何の不思議もありませんでした。しかし現在では、国際棋戦の優勝者を見ても判るように、日中韓が肩を並べる状況にあります。そして国民の「囲碁熱」という点では、韓国、中国、日本の順というのが公平な見方です。私は韓国にも中国にもしばしば出かけますので、肌で感じています。

日本の囲碁ファンの中には、日本の棋士が国際棋戦でなかなか勝てない状況に苛立ちを感じている方も少なくないようです。国際競技で自国を応援するのは自然なことではありませんが、いささか木を見て森を見ずの観も否めません。私はもつと視野を広く持つてほしいと願っています。日中韓の棋士が、切磋琢磨をして

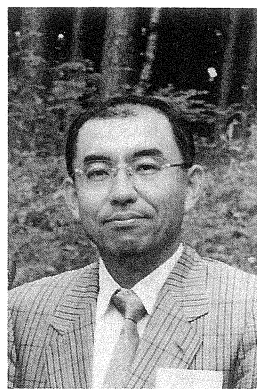
碁の内容を向上させる。そして、自国の囲碁ファンを拡大させてゆく。この「普及」ということも、我々棋士にとつて果たさなければならぬ重要な役目なのです。中国や韓国の棋士が強くなるのは、囲碁の普及という面から考えれば、大変に喜ばしいことだと私は思っています。しかも、中国、韓国の囲碁発展に、日本はちゃんと貢献しているではありませんか。こうした普及の波を全世界に広げること。日本の基界は、この視点をもつと積極的に持つべきでしょう。「本家意識」という気位の高さで勝ち負けだけにこだわっているようでは、世界から「日本の基界は自分のことしか考えていない」とか、「自分たちだけのやり方やルールに固執している」というように、政治や経済と同じような非難を受けることになりかねません。

冒頭で私は、世界アマチュア囲碁選手権戦の光景を紹介しました。日中韓の基界が、手を携えて囲碁の普及に尽くせば、あのような光景が世界のそこそこでもつと見られるようになるはずですが、その首領をちゃんと取つてこそその「総本山」であり「本家意識」なのではないでしょうか。

理想論だと言われるかもしれませんが、私は囲碁の普及が、世界平和の実現に必ず役立ってくれると信じています。また、囲碁は、人間から争いや対立をなくすため、神様が人類に与えてくれた大切な贈り物だとも思っています。ですから棋士である私は、囲碁の普及のためであれば、地球のどこへでも喜んでゆくつもりです。

エッセイ

随想



だけみや・まさき／囲碁棋士、九段。1951年東京都生まれ。田中三七一門下より65年本谷九段に入門、同年入段。本因坊通算六期、TVアジア選手権四連覇、十段三連覇、第20期名人等のタイトルを獲得。中央を重視する棋風から「宇宙流」と呼ばれる。

棚田家住宅主屋のヒロマ (富山県高岡市)

撮影/三沢博昭

富山県高岡市にある伏木港は、江戸時代の北前船によって栄えた港である。棚田家は廻船問屋を営んだ家で、その住宅は伏木港にほど近い勝興寺門前町に位置する。主屋は接道する町家の形式をもち、明治20年に高岡市内をおそった大火後の明治23年頃に建てられたと伝える。

ヒロマは、町家特有の「通り土間」に面した部屋で、最も主要な部屋のひとつである。主要な部屋の天井高を高くして縦横に組んだ梁を上部にみせる手法は、石川・富山両県を中心とした地域に特有のもので、その意匠には現代住宅で再現することができない美しさや気品が備わっている。

高岡市内には、伏木港の繁栄等を背景にして大火直後に建てられた、大規模で質の高い住宅が数多く残る。その様子は、建具や部材に漆を塗ることや太い良質の木材を用いること等によく表れている。棚田家住宅はそうした住宅の好例である。

現在高岡市では、これらの優れた歴史的建造物を活かしたまちづくりの取組みが始められようとしている。(文化財保護部建造物課文化財調査官 後藤 治)

編集後記

マルチメディア時代の到来の特集記事はいかがでしたでしょうか。電子博物館構想への第一歩というの、ちょっと言い過ぎだったかもしれませんが、ちょっとは近づいているような気分になりませんでしたか。

難しい単語が多くてわかりにくかったかもしれませんが(実は、私も全部は理解しきれていません)、どういことができるのか、また、行われているのかということ、なんとなくご理解いただけたかなと思っております。

さて、文化財の活用の新たな手法として、コンピュータは多大な威力を発揮するのではと考えます。ちまたでは文化財や美術作品の画像をアメリカの一企業が買いあさっているとの噂も流れておりますが、いまのところ排他的な契約ではなさそうなので、ちょっと安心しております。

これを契機に、みなさま方もパソコンをご購入され、ご自宅で思う存分文化財や美術作品の世界をお楽しみいただければ……。

(SM)

文化庁月報 8月号 (通巻347号)

平成9年8月25日印刷・発行

編集—文化庁

〒100-8959 東京都千代田区霞が関3-2-2

発行—株式会社ぎょうせい

本社 〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-12

本部 〒167-8088 東京都杉並区荻窪4-30-16

電話 編集 03(3571)2126

販売 03(5349)6666

振替口座 00190-0-161

印刷所—㈱行政学会印刷所

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、筆者個人の見解であることをお断りいたします。

定価540円 本体514円 送料76円

年間購読料6480円

本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先

㈱ぎょうせい営業第一課宣伝係

電話03(5349)6657 (ダイヤルイン)

©1997 Printed in Japan

ISSN 0916-9849

本誌は本文用紙に再生紙を使用しております。